中国における三農問題解決のための農家楽の可能性と課題 —浙江省杭州市桐廬県を事例とする質的調査から—

方 琳^{*1}・山本信次²・山本清龍²・藤崎浩幸³

中国では国民生活水準の向上とともに、農家楽（農家民宿や農家レストラン）を代表としたグリーン・ツーリズムが人気となっている。本研究では中国における農家楽の実態および問題点を明らかにするため、浙江省杭州市桐廬県の農家楽経営者並びに政策担当者を対象にヒアリング調査を行った。調査の結果、現在中国の農家楽は政府主導や個人経営からさらに発展し、集落や地区の協力で成功している事例が増加していた。しかし都市部を離れ、周辺観光地がない、集客の難しい農山村地域では、農家楽の発展が難しいことも明らかとなった。これは、農家楽を都市農山村格差等のいわゆる「三農問題」の解決手段とする際に、大きな課題となっていることが明らかとなった。

キーワード：農家楽、都市近郊、観光地、辺鄙農山村地、聞き取り調査

Lin Fang,^{*1} Shinji Yamamoto,² Kiyotatsu Yamamoto,² Hiroyuki Fujisaki³ (2015) The Issues Solving on the Subject and Possibility of Farmhouse Touring on Agriculture, Rural Areas, and Farmers in China: A Qualitative Case Study in TongLu, Hangzhou City, ZheJiang Province. J Jpn For Soc 97: 115-122 With the improvement of rural environment and national living standards, farmhouse touring which is a representative of green tourism in China has become popular in recent years. In order to make clear the reality and problems of farmhouse touring in China, this study investigated the managers and relevant departments of farmhouse touring in TongLu, ZheJiang Province. We found that the rate of success has increased in modern times in cases of farmhouse touring when tourist attractions have been developed in cooperation with districts and villages. The development of farmhouse touring in rural areas being far away from the city and offering no nearby attractions is difficult. Farmhouse touring as a solution method of agriculture, countryside and farmers issues is still currently a major challenge.

Key words: farmhouse touring, suburbs area, tourist attractions, remote rural areas, inquiring survey

I. は じ め に

1. 背景・目的

中国では近年の経済発展に伴い地域間格差が大きな問題となり、「農業の低生産性、農村の荒廃、農民の貧困」の三農問題は特に注目されている。中国政府も2003年以降、政策課題として三農問題を取り上げ、その解決に向け種々の政策を打ち出している。中でもグリーン・ツーリズムを通じた農山村地域の活性化もその解決策の一環として注目されている。

都市部においては経済の発展とともに、住民の生活水準が向上し、物質的豊かさだけでなく、心の豊かさを求めるニーズも増加傾向にある。1995年の週休2日制度導入、自家用車の普及による都市・農山村間の交通状況の改善といった物理的条件の向上、大気汚染など都市環境の悪化による健康志向を持つ都市住民の増加、先進国で流行している「スローライフ」的ライフスタイルへの憧れも加わり、休日に自然豊かな農山村地域を訪れる旅行がブームとなりつつある。

こうした農山村・都市双方からの社会的要請に応える形で、中国政府は農山村地域のインフラ整備、伝統的な文化の維持などを奨励し、農山村地域の生活環境を改善し、都市住民が農山村を訪れることで地域とその経済の活性化を促し、三農問題および都市の社会問題などに対応しようとしている。

こうした背景のもとで運営される「農家楽」とは中国農山村観光における最も代表的な観光形態であるといえる。農家楽に関する定義はいくつかあるが、陳（2004）は、農民を営業の主体として、農山村の風景や民俗文化を利用しながら、都市部以外の自家建物で、地域独特の料理および生活体験によって接客するという新しい観光形式を農家楽と定義している。李・王（2011）は中国の文化背景から、農家楽の特徴を郷村性、家庭性、娯楽性としている。本論文においては、農家楽を都市と農山村の交流を前提に、農山村地域で農家レストランを中心として、民宿や農林業体験などを含む「農家に宿泊し、飲食し、農林業体験を行い、農林産物を購入するなどの体験を楽しむ」ものと定義する。

農家楽発展の経緯は、全国的には1980年代の四川省成

*連絡先著者 (Corresponding author) E-mail: linlininthehouse@yahoo.co.jp

¹ 岩手大学大学院連合農学研究科 〒020-8550 岩手県盛岡市上田 3-18-8 (The United Graduate School of Agricultural Sciences, Iwate University, 3-18-8 Ueda, Morioka, Iwate 020-8550, Japan)

² 岩手大学農学部 〒020-8550 岩手県盛岡市上田 3-18-8 (Faculty of Agriculture, Iwate University, 3-18-8 Ueda, Morioka, Iwate 020-8550, Japan)

³ 弘前大学農学部 〒036-8560 青森県弘前市文京町1 (Faculty of Agriculture and Life Science, Hirosaki University, 1 Bunkyo-cho, Hirosaki, Aomori 036-8560, Japan)

(2014年11月6日受付、2015年3月2日受理)

都市・県農科村の農家楽を皮切りに、90年代後期に大都市近郊で「農家で食事、農家で宿泊」する旅行形態が一般化し、中国版「ゴールデンウィーク」の実施が農家楽の発展を更に加速させた。21世紀に入り、国民の生活水準が上がったため、農家楽を利用した観光へのニーズはさらに高まっているといえる。

本研究は、沿岸に位置し経済発展が先行し、先進的なグリーン・ツーリズムが普及しつつある浙江省を研究対象として、中国におけるグリーン・ツーリズム「農家楽」の特徴と問題点、更なる発展方向について考察するものである。

また本研究では、農家楽を詳細に検討するためにその特徴に基づいて分類し、分析を行うが、こうした分類の先行研究として陳(2004)は農家楽を地域の交通状況、経営者、利用者、季節性などの要因から、観光地農家楽、農山村地農家楽、都市近郊型農家楽に区分している。観光地農家楽は、観光名所の周辺にあり、経営者は主として農家であり、公共交通の便もよく、個人観光客や避暑や休暇を過ごすための中高年の利用者が多く、名所利用への依存度が高い。農山村地農家楽は、農山村地域にあり、現地の農家が経営し、近隣都市の中間層消費者が自家用車か電車を利用して。現地の農林産品に合わせ、閑散期と最盛期があり、連休時とくに人気である。都市近郊農家楽は都市周辺にあり、経営者は都市近郊の農家である。利用者は現地都市の市民や周辺の農家であり、季節にかかわらず、週末の日帰りが多く、その利用は次第に一般庶民の日常生活に組み込まれたと指摘した。

しかし陳(2004)の研究では、それぞれの農家楽の類型ごとの具体的な事例調査による実証部分や類型別の発展方向や問題点についての分析に弱さを抱えていることが否めない。よって本研究においては、調査対象地の現状に基づき農家楽の現状をより詳細に分析するために、陳(2004)の定義を援用し、農家楽を①観光地農家楽(観光地に隣接する形態)、②辺鄙農山村地農家楽(一般的な農山村部にある形態)、③都市近郊型農家楽(都市に隣接する農山村部に存する形態)に区分することとした。

こうしたそれぞれの区分ごとの農家楽の実像を明らかにするとともに、農家楽の発展が三農問題を中心とした都市-農山村の格差は正につながりうるのか、つながり得るとすればそれはどのような条件に基づくものなのかを実証的に明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

農家楽に関する文献調査および中国浙江省杭州市桐廬県の農家楽を先述した3区分に分類した上で、区分ごとに地区行政関係者と農家楽の経営者に聞き取り調査を行った。

地区行政関係者に対しては桐廬県の農家楽の歴史、現状、農村計画、政府の支援状況および今後の展望について聞き取りを行い、桐廬県の農家楽の現状を全般的に把握した。また、実際の農家楽の運営状況を明らかにするため、農家楽経営者に経営主体、目標、経緯、経営効果および現

在の問題点などについて聞き取りを行った。

3. 対象地域の概要と選定

1) 中国の行政区画

中国では、地方行政を4層の垂直構造に分けている。最上層を第一級行政区画と呼び、23の省、5つの自治区、四つの直轄市、二つの特別行政区の計34の行政区からなる。第二層の地級の行政単位は地級市、自治州、地区などがある。人口や面積といった規模は、日本の市より県に近い。第三層の行政単位が県、県級市である。日本と比較した場合、県より郡に近い。第四層の行政単位が郷や鎮などの郷級行政区である。日本における基礎自治体に近い存在である。本研究は、浙江省杭州市に属している桐廬県を調査対象地区とした。

2) 浙江省ならびに桐廬県の概要と農家楽の現況

浙江省(図-1)の2013年の省内GDPは全国第4位で、都市化率は63.2%(李・江 2013)である。1人当りの平均収入は都市部13年連続全国第1位(直轄市の上海、北京を除く)、農山村部は29年連続第1位(直轄市を除く)(呂 2014)、都市農山村の格差は2.35:1で、全国の3.32:1より低い。しかし、都市化は進んでおり、農山村部では1人当りの耕地面積の減少、農家の兼業化、高齢化など農業資源が不足、農業衰退の傾向がみられる。しかし、2004年と2012年を比較すると農村戸籍を都市戸籍(注1)に変更する戸籍変更数は67%減少し、都市への人口流入は収まりつつあり、先進国のように「反都市化」(注2)とよばれる傾向もみられつつある。

浙江省における農家楽の発展は全国的傾向と同様に1980年代に誕生、90年代後期から発展を始め、2004年時点で農家楽や漁家楽など1,500戸程度、従業員は約1.3万人、来客数は1,385万人、総生産額は7.34億元に達した(張・申 2006)。2006年には中国「国家農業旅行モデル地域」の称号を授与され、2009年までに農家楽は1,678戸に達し、従業員は11.26万人、農家楽および観光農業の総生産額は78億元に達した(郭・呂 2011)。

桐廬県(図-2)は浙江省西北部に位置し、省都杭州市から南西90kmに位置し、面積1,825km²、人口約40万人の地方都市である。2012年地域GDPは249.25億元(1元=17.79円、以下同じ)、都市住民1人当り可処分所得は30,301元(全国は24,565元)、農山村住民の1人当りの純収入は15,232元(桐廬県統計局 2013)(全国は7,917元)である。

桐廬県を選定した理由は第1に桐廬県は政策的に新農村建設(注3)に力をいれ、農山村振興を強力に推進していることにある。2003年から2005まで3年間連続「中国百強県(市)」(注4)であり、2012年まで都市化率は63.1%と経済社会の発展過程としては成熟期を迎えており、中国国内の一つの先進事例と位置付けられる。政策的には三農問題の解決に留まらず、工業と農業、都市と農山村、都市住民と農民を一つのまとまりとした発展計画を目指し、旅行開発を新農村建設に関わる重要な事業として位置付けて

図-1. 中国の地図および浙江省の位置

出所：Baidu 画像 <http://image.baidu.com/> より著者が加筆。浙江省は中国の華東地区の中部に位置し、東シナ海に面す。図-1 は中国全国の地図であり、○をつけられた部分は浙江省である。

図-2. 浙江省の地図および桐廬県の位置

出所：Google 画像 <https://www.google.co.jp/search?q=浙江省地図より著者が加筆>。図-2 は浙江省の地図であり、○をつけられた部分は桐廬県の位置である。

図-3. 桐廬県の地形図

出所: <https://www.google.com/maps/@29.7544761,119.7207861,38846m/data=!3m1!1e3?hl=zh-CN> より著者が加筆。点線の部分、町の中心部、楕円の部分、調査地の辺鄙農山村地:長方形の部分、調査地の観光地:△、桐廬町の観光名所:◆、調査地の代表事例の農家集の位置。

いる。「桐廬県十二五新農村建設發展企画」には、美しい郷村づくりが明確な目標として掲げられた。2011年、桐廬県は「中国魅力新農山村十佳県」(注5)に選ばれた。2012年全国レジャー農業と郷村旅行モデル県と認定され、杭州市内唯一かつ初のモデル県である。2013年桐廬県の環溪村は中国住宅・都市農山村建設部による「第一陣美しい小鎮・村建設のモデルリスト」にも選定されている(中華人民共和国中央人民政府網 2013)。

第2には、観光業が急速な發展をみせていることである。桐廬県は1979年「瑤琳仙境」の開発に始まり、30年間の観光開発期間中、観光産業の規模は絶えず拡大している。2003年から「山水祭」を開催、「自然を抱擁」の旗を掲げ始めた。2006年に、第10回世界「国際花園都市」(注6)の決勝戦で「国際花園都市」の称号を獲得した。2009年までに観光名所は19カ所に達し、その中で国家4A級(注7)名所2カ所、3A級名所1カ所、国家森林公园二つがある。2012年の全県の観光客数は757.01万人、観光業の総収入は73.50億元に達した(林 2013)。2012年「中国最美県」と2013年の「長寿の郷」(注8)の称号を獲得している。

桐廬県は山岳地帯であり、周囲に群山がそびえ、中部は河川沿いに平原が広がり、都市的地域の中心部はその平原に位置する。1990年代の蘆茨村の農家楽を嚆矢に農家楽の發展が始まる。2002年県政府は「農家楽の發展に関する意見」並びに「桐廬県旅行發展に対する支援意見」を策定した。2006年、桐廬県レジャー観光農業旅行チームを發足させ、専門の事務室を設定した。2011年には「農家楽發展に関する実施意見」を作成し農家楽の發展、インフラ建設、宣伝などのために毎年「農家楽資金」を計上している。2011年までに桐廬県レジャー農業と郷村観光のモデル村は17に上り、農家楽は150戸に達している。農家楽の従業員は1,788人、観光客108.5万人、營業額は6,780.3万元に達した(徐 2012)。2011年、桐廬県は杭州市内で初めて中国農業部国家旅行局に「全国レジャー農業と郷村旅行モデル県」として指定されている。桐廬県の地形図(図-3)のように、桐廬県の川沿いには観光地が多く存在する。また、農家楽も観光地、および都市的地域周辺への立地が目立つ。しかし、都市的地域から遠く離れた交通不便の辺鄙農山村地では、農家楽の数は少なく、観光地や都市的地域周辺との格差が明らかにみられる。

桐廬県の農家楽の現状をより詳細に分析するために、本研究では陳蕾の定義を援用し、農家楽を①観光地農家楽(観光地に隣接する形態)、②辺鄙農山村地農家楽(一般的な農山村部にある形態)、③都市近郊型農家楽(都市に隣接する農山村部に存する形態)に区分し、調査を行った。調査事例はそれぞれ①桐廬県富春江鎮の芦茨村、②莪山シャ族郷、鐘山郷、③城南街の周辺である。

II. 調査結果

1. 観光地農家楽-桐廬県富春江鎮芦茨村

富春江鎮芦茨村は桐廬県の西南部に位置し、県の中心部からは遠隔地にあるものの、村落内には白雲源森林公園、嚴子陵釣魚台の二つの4A級の観光地区と江南龍門灣などの名所があり、山水調和、農漁村風景にあふれ、多くの観光客が集まる。芦茨村の総村民委員会(注9)の委員によると、芦茨村には七つの集落があり、村全体の面積は54.5km²、人口は1,313人(2012年)である。芦茨村の芦茨灣は鵝飼の伝統もあり、河川を利用した天然プールでも有名である。心地よい風景の他、歴史、民俗文化、民間手工芸、古街、古橋、祖廟、寺院、百歩街に恵まれ、元代の画家黄公望の名作「富春山居図」の取材地の一つでもある。村内の白雲源観光地は、龍門山脈に位置し、主峰の觀音頂は(1,246.5m)富春江地区の最高峰である。地域の森林率は98%に達し、多彩で奇異な山の中で、滝や深い淵が数十か所あり、80年代から“江南の九寨溝”、“富春江のシャングリラ”と讃えられてきた。

1990年代、芦茨村では農家風レストランが誕生したが、2002年に白雲源地区で初めての農家楽が誕生した。芦茨村の梅樹村委員会への聞き取りからは、当時、芦茨郷の郷長(現在富春江鎮の鎮長)沈氏は農家楽の将来性を感じ、村委員会委員を伴い、農家楽先進地である浙江省にある金華市の仙華山へ視察を行い、その後村民へ農家楽の經營を推奨した。その上で周辺のインフラ建設や観光客の誘致などのため県政府と交渉し、支援を要請した。2009年、杭州市農業農村事務局、桐廬県農業農村事務局、郷政府の支援に加え、村民の寄付により3,000万元の基金を作り、浙江省初のスローライフ体験区-芦茨村風情小鎮(農家楽の集団立地と体験農園などの一体的整備地区)の建設を開始した。2012年時点で、芦茨村の60%以上の家庭は農家楽を經營しており、総数は60戸、さらに15戸の家庭も農家楽開業を申請中である。芦茨村の農家楽は主に芦茨中心村と梅樹村(ともに集落名)にあり、2013年10月時点、食卓数は600卓、ベッド数は1,500床、2012年の年間旅客数は9万人、營業収入は2,500万元に達した。この地区は、2006年に県内初の農家楽協会を設立し、農家楽の運営力向上などの自主管理を行ってきたが、スローライフ体験区ができてから、政府の指導の下で、村委員会が農家楽を管理している。内容的には杭州市農業農村事務局および県政府は毎年經營者を対象に、1~2カ月程度の育成研修会および教育指導を実施している。

具体的事例について詳述すれば「白雲源人家」は芦茨村の最も古い農家楽である。經營者夫婦は、2002年に村委員会の指導の下で、レストランでのシェフの経験を活かしながら自家の建物で農家楽經營を開始した。2009年から年間収入は30~40万元(2009年浙江省の平均年間収入は22,727元/人)に達し、家庭総収入のほぼ80%を占めるに至っている。聞き取りからは芦茨村農家楽の利用者は主

に上海、江蘇省と浙江省内の団体客であることも明らかとなった。利用料金は時期により異なるが、閑散期は1泊3食70～80元、最盛期は120～150元程度である。繁忙期は夏秋で、2、3カ月前からの予約が必要であり、その人気が伺われる。

杭州市社会主義新農村建設指導グループ事務局2010年の発表によると、芦茨村スローライフ体験区の進行は桐廬県新農村建設の目標の一つとして重視されている。現在芦茨村の農家案は、全員現地の農家が自家の建物で経営をしている。食と宿のほかに、農園体験やタケノコ取りなどの体験プログラムも用意されている。体験区管理委員会によると、2012年農家案の発展は、村内300人の就業問題を解決したとされている。地域振興政策としての新農村建設の成功例といえる。しかし現在、村の中での農家案同士の競争も激しくなっており、公共交通機関でのアクセスの不便さなどの問題も顕在化している（表-1）。

2. 辺鄙農村地農家案-桐廬県莪山シャ民族郷と鐘山郷

1) 莪山シャ民族郷

莪山シャ民族郷は杭州市唯一の少数民族郷で、桐廬県中部に位置し、県の中心部から約10km離れ、全地区の面積は28.73km²である。桐廬県で有名な竹の郷でもある。光緒元年（1875年）に文成、青田一帯から移動・定住したシャ民族が次々と村を創立した。シャ民族の名字には藍、雷、鐘、李の四つがあり、莪山は独特なシャ民族の文化拠点として発展し、今もなお一部の地区がシャ民族の言語と冠婚葬祭等の習慣を強く残している。

莪山シャ民族郷は1988年に、中国人民政治会議杭州市委員会の提案で少数民族支援策として設立された。新農村建設の重点地区として、農家案などの新興産業で三農問題を解決する方策は社会的に注目されている。2012年まで、

全郷は13の行政村を管轄して、総人口は9,550人、その中でシャ民族人口は2,711人、総人口の28.4%である（市委办2013）。莪山は山々に植えられた名産の竹の緑に囲まれ、棚田の景観が美しい、自然豊かな地区である。郷内のシャ民族山村は2006年に星級（注10）の郷村旅行地区と指定された（注11）。地区内のベッド数は49床あるが利用者のほとんど食事利用のみである。平均利用額は30元程度と安価である。2010年4月16日、シャ民族の郷政府は杭州市政府との協力で歌舞団や現地のシャ民族住民から山歌、武術などのイベントを通じて“三月三”と呼ばれるシャ民族文化祭を開催している。

このように杭州市政府および県政府は少数民族居住地区である莪山の発展を非常に重視し、様々な助成支援を行ったが、県内他地区と比較した場合、農家案の経営状況は順調とはいえない。郷政府の職員によると、莪山の農家案は政府の勧めで経営を開始したが、周辺観光地がなく、山の奥にあり、車で市内から1時間以上かかり、インフラ建設や宿泊施設が不完備のため、外来の利用者が少ないといった問題を抱えている。

具体的事例について詳述すれば「洪聚萍土菜館」は莪山民族郷にある農家案で、現在夫婦2人だけで運営されている。聞き取りによれば2004年に、莪山郷政府の指導に基づき、経営を開始した。開業当初は、政府からの支援金や地区行政による直接的な顧客の紹介、行政職員の直接的飲食利用などもあり、一時的に経営は安定していた。しかし顧客の紹介などの支援も終了し、さらに中央政府が汚職追放の一環として始めた2012年12月からの「八項規定」（注12）の改革を実施して以来、勤勉節約などの方針を定めたことで、行政職員による飲食利用が減少し、それにもなって食事利用収入も大幅に縮小した（表-2）。

莪山郷の農家案の数は2004年の7戸から現在の3戸にまで減少し、衰退傾向が著しい。

2) 鐘山郷

鐘山郷は桐廬県中南部の山岳地帯に位置して、桐廬県の中心部から約14km離れている。全地区の総面積は107.77km²、11の行政村を管轄している。2009年まで、郷全域には世帯数は7,488戸、人口は21,356人である。鐘山郷は杭州市最大の梨生産地である。鐘山郷では2001年から始まったイベント「梨の祭」が多くの観光客を集めている。2009年から地区政府は新農村建設を促進しているが、莪山シャ族郷の事例とは異なり観光農業や農家案などのグリーン・ツーリズム起業そのものへの支援は制度的にみられない。当地は山地かつ交通不便などの原因で、集客力が弱いため、農家案の発展は難しい状況にある。特に、先述した2012年の政府の改革開始以来、農産品などの販売も低迷し、2013年3月現在、かつて3戸あった郷内の農家案は一つも営業していない。

具体的事例について詳述すれば盛隆農荘は現在鐘山郷で最後まで営業していた農家案である。経営者夫婦は全国的な農家案開業ブームに刺激され、2008年に自らの居住す

表-1. 観光地農家案の代表事例

名称	白雲源人家
位置	芦茨村の梅樹村；桐廬県の中心部から19km
経営主体	村委員会の指導の下で、夫婦2人で経営
経営動機	レストランでシェフをした経験を基に、実家で技能を生かしながら起業したいとの希望から農家レストランを開業した
規模	自家建物；レストランの最大収容人数は90人；宿泊施設は最大25人
平均利用額	1泊3食、閑散期 70～80元/人；繁忙期 120～150元/人
利用者	上海、江蘇省および浙江省の団体客が多い
政府からの支援	施設整備（テーブル、ベットなど）への補助 金技能講習；シェフの養成訓練など
経営効果	2009年から平均年間収入30万～40万元、家庭総収入の80%ぐらい
難点	地区としての知名度は上がったが、村内農家案間の競争も激しい；公共交通が不便のため、貸切バスによる団体客が主で県内の顧客が少ない；政府には閑散期の対応策をつくってほしい

観光地農家案の中に、芦茨村の代表事例を分析した表である。

表-2. 辺鄙農山村農家楽の代表事例

名 称	洪聚萍土菜館	盛隆農莊
位置	我山シャ民族郷；桐廬県の中心部から 9.59 km	鐘山郷；桐廬県の中心部から 14 km
経営主体	夫婦 2 人で経営	夫婦 2 人で経営
経営動機	郷政府に勧められた	周辺の農家楽ブームを見て、起業した
規模	自家建物；最大収容人数は 80 人。サービスに割ける労力がないため、レストランだけを経営している	自家建物；レストランだけを経営している。最大収容人数は 100 人
平均利用額	30～40 元/人	30～40 元/人
利用者	政府の職員（2012 年から減少）、周辺工場の職員、住民が中心、祭りの際に限り外来の団体顧客	政府の職員（2012 年から減少）、周辺企業・工場の職員
政府からの支援	開業資金補助、開業当初の顧客団体の紹介	特にない
経営効果	年間 10 万～15 万元ぐらい	2013 年 3 月から休業、家庭収入の比率不明
難点	都市から離れ、周辺観光地もなく、交通不便などの原因で、外来の顧客が少ない；政府の改革に影響を受けやすい	山の奥にあるから、顧客が少ない

辺鄙農山村地にある農家楽の事例であり、左は少数民族地区にある農家楽であり、右は単の農山村にある農家楽である。少数民族という特殊政策以外の農家楽の現状を分析した表である。

る建物で起業し、農家楽経営を開始した。しかし 2012 年の調査時点では、利用している顧客はほぼ周辺の工場職員の食事利用に限られ、2013 年 3 月に休業に至り、今後も再開の意向はないとしている（表-2）。

3. 都市近郊農家楽-城南街周辺の農家楽

城南街は桐廬県政府の所在地で、桐廬県の全体は富春江を境にして、江北の区域は桐君街で、江南の区域は城南街と分かれている。新しい街である城南街では 19 の行政村があり、地区の面積は 97.11 km²、人口は 97,247 人である。ここ数年来、城南街は工業化、都市化、新農村建設をめぐって、数多くの事業が同時並行して行われている。

桐廬県農業農村事務所の経済発展科科长の俞氏への聞き取りから、城南街の周辺には 30 戸以上の農家楽が存在し、その数が増加しつつあり、規模や経営形態も多様である。経営者の多くは郊外の農家だが、まれに純然たるレストラン経営もみられ、「農家が経営しない農家楽」、いわゆる農家風レストランとの区分が難しいものもある。こうしたことを背景として、都市近郊の農家楽の建物は自家建物と貸家の双方が存在している。具体的事例についてみれば「安安農莊」は家族全員 6 人が自家の建物で農家楽を営んでいるが、「望江人家」は主婦の 3 人が農家を借りて、農家楽を営んでいる。こういった農家楽の顧客は近隣都市の住民が中心で、年間で閑散期と繁忙期の繁忙の時期的変動が少ない（表-3）。

表-3. 都市近郊農家楽の代表事例

名 称	安安農莊	望江人家
位置	城南街の周辺、中心部から車で 10 分	城南街の周辺、中心部から車で 10 分
経営主体	家族全員 6 人（両親、長男夫婦、次男夫婦）	主婦 3 人経営
経営動機	農家楽がはまっている；自家建物が広い、農産物も充実；家族だけでできる事業をやりたい	周辺の農家楽ブームを見て、主婦 3 人が工場の仕事をやめて起業した
規模	自家建物；最大収容人数は 120 人；レストランだけを営んでいる	貸家、最大収容人数は 100 人；レストランだけを営んでいる
平均価格	40～50 元/人	70～80 元/人
利用者	都市住民、周辺工場の職員住民、政府職員など	都市住民、政府職員、旅行の季節になると上海、杭州市内の顧客もいる
政府からの支援	特にない	特にない
経営効果	年間 20 万～30 万元ぐらい 近年経営が難しくなっている	年間 40 万元ぐらい
難点	周辺農家楽の数は年々増えている、競争が激しい	政府の改革政策を実施して以来、客の数がかなり減少

都市近郊にある農家楽の事例を分析した表である。

III. まとめと考察

調査結果から明らかになったこととして第 1 に観光地農家楽、辺鄙農山村地農家楽、都市近郊農家楽のすべての立地地区が政府の新農村建設地区に位置付けられており、政府はいずれの地区も振興すべき農山村を位置付けていることが理解できる。

第 2 に、しかしながらそうした位置付けに関わらず政府の支援には区分別に大きく相違がある。3 区分の中で観光地農家楽には多大な政府補助が行われているにもかかわらず、日常的なレストラン利用の需要に恵まれ農家が自主的に開業することが通例の都市近郊農家楽には政府補助がなく、辺鄙農山村地農家楽は少数民族対策という特別な場合にのみ補助が行われている。このことから政府の補助は観光一般への補助と連動して行われており、農家楽を含む農山村観光あるいは農山村そのものの発展への補助として位置付けられていないことが理解できる。

第 3 に政府支援を受けられた少数民族地区の辺鄙農山村地農家楽と観光地農家楽の差異についてである。この二つを比較することで別の問題が浮き彫りになる。すなわち、同じように政策的テコ入れが行われながらも農家楽数が減少している辺鄙農山村地農家楽と順調な経営が伺える観光地農家楽の差異である。後者は観光地ならではの団体客の継続的利用による順調な経営がなされている。しかしながら辺鄙農山村地では、少数民族対策という特殊事情がある場合に限り政府支援が受けられる一方、農家楽を開設しても都市から遠く、観光名所でもないため、農家楽の利用者

は近隣の住民が中心で、客数は伸びず経営の衰退が著しい。政府の支援を受けられなかった辺鄙農山村の事例からはさらに経営の困難さが伺える。以上のことから、たとえ政府補助があったとしても、周辺都市からの利用や観光客の継続の利用がない農村部では農家楽の経営は困難なことが明らかとなった。

第4に、地域住民や地元行政の積極的経営意思の存在も重要である。観光地農家楽の事例としてとりあげた芦茨村では、損委員会を中心に村民自らが市・県政府と交渉し、国家補助も利用するという村民・村行政の役割が観察された。一方、経営の衰退傾向がみられる辺鄙農村地の少数民族地域では同じように国家等からの支援を受けたにしても農家楽経営は政府の推奨による受動的な立場でのスタートであり、経営改善への要望でも政府への依存度が高い傾向が見受けられた。こうした点から経営者の自発性も重要といえるだろう。また、農家楽自体も個人経営が基本だった開始時から変化し、集落や地区の協力が必要となりつつあることが芦茨村の事例から伺える。こうした点から個別の農家楽経営のみならず、地域として郷村観光に取り組む積極的姿勢も重要といえるだろう。

第5に、都市近郊農家楽は、需要地に近く、政府支援がなくても自発的に経営を發展させている。観光地農家楽と異なり利用者は隣接都市の住民が中心で、集客に波もなく最も安定している。ただし、最もアクセスしやすい都市近郊の農家楽は、日々の利用率が高いため食材はほとんど自家産ではなく、地元の農家や市販品を仕入れている。すなわち、都市近郊の農家楽は少々変わった高級レストラン化している傾向もみられ、農家への所得移転という目的からは逸脱傾向があることも否めない。

第6に、辺鄙農山村地の農家楽は、観光地、都市近郊の農家楽より利用料金として安価であり、農山村ならではの豊かな自然に恵まれ、郷村観光の本来的な目的からは理想的な場所であるにも関わらず、現実の経営は非常に困難に直面している。これは本来、三農問題が発現している一般的農山村への再分配の回路としてグリーン・ツーリズムが機能していないことを意味している。浙江省全体からみれば、農家楽の経営が盛んな村はほとんど都市近郊あるいは観光地周辺にあり、美しい農業景観だけではなく、地域独特の農家料理、農耕文化および低価格をセールスポイントとして發展している（張ら 2009）。現在の中国国民は、大都市周辺といえども、欧州にみられるように「普通の農村」の景観や農山村そのものを楽しむ意識がまだ醸成されていないものと理解できるだろう。

以上のことから、三農問題の解決手段として農家楽を手段とする場合、自律的な経営は都市近郊や観光地周辺にしか生じ得ず、一般的な農村への再分配の手段として機能させるためには政府支援等の方策を検討する必要がある。こうした点から中国におけるグリーン・ツーリズム、農家楽を發展させ、かつ三農問題解決と結び付けていく方向性は以下のように考察できる。

1) 行政の長期的・計画的支援の必要性

調査結果からは、2012年の「八項規定」の実施は全ての農家楽に大きな影響をもたらした。農家楽は通常のレストランとは素材や鮮度などの点で異なり、ある種の「高級レストラン」であり、来客への接待など点で行政関係者の利用に占める割合が大きかった。こうした利用減少はやむを得ないものとはいえ、需要に恵まれない地域での農家楽経営を軌道に乗せるためには行政による長期的・計画的支援が必要といえよう。辺鄙農山村地農家楽が示すように、現在の段階では、農家楽の成否のカギは初期の資金援助、インフラ建設などハードの支援だけではなく、観光客の誘致、イベントの導入、観光プログラムの開発、経営管理の指導を含めた人材育成などソフト面の支援も必要である。

2) ホスピタリティに関する認識の養成

農家楽の経営の成功に大切な要因として顧客の確保があげられる。しかし現代の消費社会においては、単に他の企業と違う製品・サービスをつくり提供しても、すぐにその目新しさ、優位性は追いつかれてしまい、製品・サービスそのものだけでは他の企業との差別化は図れなくなっており、製品・サービスが顧客に提供される際に生じる人と人との接点において顧客が感じる満足感が再購買や再利用ひいては顧客拡大に大きく影響しているといわれている（安部 2013）。こうした点から農家楽に必要とされる「人と人との接点において顧客が感じる満足感」とはホスピタリティといいかえることができるだろう。そこにおいて重視されるのはサービスの提供者-消費者としての関係だけではなく、人と人とのふれあいであろう。事例の観光地・芦茨村では持続的な發展のために、施設・サービス水準の改善、地域全体の推進計画などが行われているが、それに加えて経営者のこうしたホスピタリティ意識を醸成することが、農家楽の持続發展に極めて大切なことといえよう。

3) 「ありのままの農山村を楽しむ」ことのできる美意識醸成の取り組みの必要性

本調査の結果からは利便性の高い農家楽の利用が盛んであることが明らかとなった。この傾向は利便性の重要性を示していると同時にもう一つの可能性を示唆している。それは中国における都市住民のグリーン・ツーリズムに対する意識の成熟度の問題である。グリーン・ツーリズム先進地である欧州や日本においては必ずしも交通が便利な農山村だけがグリーン・ツーリズムの人気対象地ではない。それはグリーン・ツーリズムの本質が、農山村を舞台に、農山村地域の自然や景観のありのままの姿を楽しむものであるからといえるだろう。調査の結果からみれば、現在の中国では浙江省のような都市化が極めて進んでいる地域でも、農山村地域の自然や景観のありのままの姿を楽しむ意識は未だ薄い可能性が考えられる。こうした点を明らかにするために筆者らは現在中国における農家楽についての意識調査を実施中である。

ともあれ、今回の調査結果と先進国におけるグリーン・ツーリズム行動との比較から、こうした仮定にある程度蓋

然性があるものと判断できよう。こうした「ありのままの農山村を楽しむ意識」の希薄さが遠隔地の農家楽経営の困難さにつながっているのであるとすれば、「ありのままの農山村を楽しむ」ことのできる農山村に対する美意識を醸成することが必要といえる。日本においては、こうした意識を醸成し、都市と農山村の関係を「対立」から「融合」へと誘導するため種々の対策が行われてきた。都市住民の「食」と「農」への関心の高まりや潤いと安らぎのある生活、土地や生き物との触れ合いに対するニーズに応えるとともに、都市的地域では農地の有効利用や都市住民の農業理解の促進等を、また農山村地域では遊休農地の解消や都市農山村交流による地域活性化などを目的としての市民農園（内藤 2011）を開設したり、農山村を舞台とする体験教育旅行、学校の教育によって子どもの頃から自然や農山村を体験できる教育的要素を取り入れた取組みがなされている（鈴木 2011）。現在の中国においても農山村に対する「美」意識を醸成し、都市と農山村の「融合」を進めるためにはこうした取組みを展開することも必要といえるだろう。

引用文献

- 安部桂子（2013）接客教育とホスピタリティ。（ホスピタリティ入門、青木義英・神田孝治・吉田道代編、新曜社）、120-125
- 中華人民共和国中央人民政府網、住房城鄉建設部関与公布第一批建設美麗宜居小鎮、美麗宜居村示範名單的通知、建村 2013 年 159 号、www.gov.cn
- 陳 蕾（2004）浅析農家楽の興亡与發展、四川經濟管理学院学報 2004 年 03 期：10-20
- 郭 煥成・呂 明偉（2011）休閒農業与鄉村旅游發展工作手冊（第二版）、中国建築工業出版社
- 李 飛雲・江 耕（2013）浙江城市化率達 63.2% 代表擔憂造城運動、中国新聞網、http://www.chinanews.com/df/2013/01-27/4523605.shtml, 2013/01/27
- 李 鵬・王 秀紅（2011）鄉村旅游經營者多維目標研究、科学出版社
- 林 琳（2013）我県“十二五”旅游業發展規劃實施情況中期評估報告出爐、今日桐廬：第 2148 期-04
- 呂 昂（2014）2013 年浙江省城鄉居民收入水平居全国省区首位、新華網 http://www.zj.xinhuanet.com/newscenter/focus/2014-02/24/c_119473169.htm, 2014/02/04
- 内藤重之（2011）市民農園の展開と都市・農村交流（都市と農村—交流から協働へ、橋本卓爾・山田良治・藤田武弘・大西敏夫編、日本經濟評論社）、113-129
- 市委办（2013）中共杭州市委員會事務所文件、2013 年 6 号
- 鈴木忠義（2011）都市と農山村の交流、世田谷川場ふるさと公社、42-43
- 桐廬県統計局（2013）桐廬県 2012 年国民經濟和社会發展統計公報（2013/01）、4-5
- 徐 軍勇（2012）休閒農業和鄉村旅游業成為新的重要增長点、杭州日報、http://hzdaily.hangzhou.com.cn/hzrb/html/2012-01/12/content_1205295.htm, 2012/01/12
- 張 德修・申 保珍（2006）浙江社会主義新農村建設實踐、學習与創新 2006 年 29 期、http://www.jmnews.com.cn, 2006-6-14
- 張 建国・俞 益武・蔡 碧凡・夏 盛民（2009）浙江“農家楽”旅遊開發的動機与實現途徑、商業研究 2009 年 05 期：169-174

注 記

- （注 1）戸籍制度は 1958 年から実施され、中国の国民を医療、教育、就業などの領域で農村戸籍と都市戸籍に分けて様々な政策を実施した。2014 年 7 月 30 日に戸籍登録制限を撤廃され、都市農村間の転入は農民自身が選択することになった。
- （注 2）都市的地域から田舎へと人口が移っていく統計的および社会的プロセスのことを中国ではこのよう表現する。
- （注 3）社会主義新農村建設とは、都市と農村の經濟・社会發展を協調させることを堅持したうえで、「生産を發展させ、生活を豊かに、氣風を改善させ、村を美しくし、民主的管理を行う」という概念である。
- （注 4）中国国家統計局が經濟力および競争力から全国 2,000 カ所以上の県の中で、100 の先進県を選定する。
- （注 5）中国電視芸術家協會と中国センターテレビ（CCTV-7）の提携で放送された「新農村電視芸術祭」番組における選定。
- （注 6）國際ガーデン協會と国連環境企画署が主催のコンテストで、「緑のアカデミー賞」として中国国内では知られている。
- （注 7）「4A 級」「3A 級」中国では観光地を旅行安全、交通状況、サービスレベル、衛生状況、歴史文化の価値などの品質によって、高い順から AAAAA（5A 級）、AAAA（4A 級）、AAA（3A 級）、AA（2A 級）、A 級の 5 等級に区分している。
- （注 8）中国老年学会が認定する称号。現在中国全体で 49 カ所が指定されている。
- （注 9）村民委員會組織法、居民委員會組織法に位置付けられたそれぞれ農村、都市の住民の自治組織であり、地方人民政府ではない。しかしこれら委員會の主任、副主任、委員は、住民の選挙によって選ばれ、委員會は有権者で構成する住民の会議に対して責任を負うこととなっている。
- （注 10）浙江省農業農村事務所がインフラ施設や、安全、衛生、環境保護などの項目によって農家楽を評価する方法である。高い順から 5 つ星、4 つ星、3 つ星、2 つ星、1 つ星がある。
- （注 11）これは有名観光地ということではなく、少数民族への優遇措置という意味合いが強い。
- （注 12）習近平就任当初の発言、高級官僚幹部はすべからず贅沢と浪費を廃して質素儉約に努め、實質的な仕事をすべしという指示。